

平成 29 年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 19	公益目的事業 19
主査名	高見淳史 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻准教授	
研究テーマ	交通サービスの革新と都市交通計画	
研究の目的： <p>コンパクトシティ・プラス・ネットワークを目指す計画制度の変革とともに、新しい交通技術、交通インフラ、交通サービスが登場しつつある昨今、都市交通計画は大きな転換点にある。本研究ではこの動向を踏まえつつ、新しい交通サービスを都市の中へ受け入れるにあたっての計画論に関して検討を深めることを目的とした。</p>		
研究の経過（4月～3月）： <p>研究会を4回開催し、メンバーや外部講師からの話題提供に基づいて討議を行う形式で進めた。具体の経過は次項で併せて述べる。</p>		
研究の成果（自己評価含む）： <p>第一に、2018 TRB Annual Meeting やその他セミナーなどから、Mobility as a Service (MaaS) をはじめとする新しい交通サービスの動向ならびに交通や都市への影響に関する研究動向の情報を収集し、課題や展望を整理した。また、それらの社会や都市（街路）空間への受け止め方に関し、“Autonomous Urbanism”など海外の2つの提案事例の内容を整理した。</p> <p>第二に、わが国大都市圏郊外部における統合モビリティサービス（IMS）の実装方法として Metro-MaaS を提案し、SP 調査に基づく需要評価を行った。また、仮想的な Metro-MaaS サービスを対象に、価格やオペレーターサービス供給者間の契約形式の違いが各主体の収益に与える影響を、研究メンバーの藤垣らが提案している Multi-Cycle Model (MCM) の枠組みを用いて分析し、MCM の1つの適用性を示した。</p> <p>第三に、横浜国立大学 COI プログラムにおけるモビリティ分野の研究・開発の状況を報告するとともに、マルチモーダル情報提供サービスや協働・共有型モビリティなど多様な交通サービスを支える技術開発や提供方法のあり方について検討した。</p> <p>以上のほか、公共交通オープンデータの現状と展望、モビリティシェアリングオークション、市町村都市計画マスタープランにみる都市交通計画の現状などについて討議を行った。総じて、新しい交通サービスの関連研究・実践の動向を追うとともに、その分析方法や技術開発の方向について検討を深めることができたと評価する。</p>		
今後の課題： <p>まず、IMS の設計などへの MCM の適用性をさらに示し、分析枠組みとしての改善・発展を図ることが課題である。また、(MCM の射程にも含まれるが) 新しい交通サービスの中長期的影響に関する研究も展開し、より“総合的な”都市交通計画の計画論に向け検討を続けることが課題である。</p>		